ポスターセッションⅡ

11月12日（木）10：00～11：25／展示室

座　長　有限会社メディカルサービス廿日市　総務部長　齊本　昌三　氏

座　長　有限会社ポプラ　佐藤　修　氏

テーマ３：グループホームケア、パーソン・センタード・ケア、自立支援、自己決定支援、フレイル予防 等

テーマ４：地域貢献・連携､地域拠点・認知症カフェ、認知症伴走型支援、若年性認知症、地域包括ケア・共生社会 等

テーマ７：その他 上記１～６に含まれない取り組み 等

時間	演題 / 副題	所　属	発表者（都道府県）
10：00 〜	ここは違うよ。おうちへ帰りたいよ。 【いつもありがとうね。】と笑顔で職員に話した日	グループホーム　よもぎ埜	横澤　佳奈 （宮城県）
10：10 〜	パーソンセンタードケアを考える BPSDは、心のサイン〜その人らしさとは〜	グループホーム　歩風楽　A棟	青野　夏実 （宮城県）
10：20〜　発表①〜②　質疑応答（5分間）			
10：25 〜	「役割を持ちたい」という思いを支える グループホーム入居者の就労継続支援B型利用に向けた取り組み	社会医療法人慈薫会 グループホーム大阪緑ヶ丘	河原　康仁 （大阪府）
10：35 〜	認知症の人が地域の担い手となる実践 ~子どもたちとの協働による地域清掃活動を通じた地域共生の取り組み~	社会福祉法人ライフの学校 グループホーム幸町キャンパス	遠藤　　圭 （宮城県）
10：45〜　発表③〜④　質疑応答（5分間）			
10：50 〜	GHでのボランティア活動 職員とボランティアの連携・運営	多機能地域ケアホーム ありがとう　グループホーム	妹尾　佳子 （広島県）
11：00 〜	BPSDの支援と職員の自己効力感調査 認知症チームケア推進加算・当施設での取り組みの効果	グループホーム　やすらぎの家	小林　泰喜 （島根県）
11：10 〜	Life with a smile 心をかよわせるふれあい交流	（株）ケアトラスト メイプルリーフ名木	塩原　大地 （京都府）
11：20〜　発表⑤〜⑦　質疑応答（5分間）			
総　評			

演題番号
ＰⅡ－①

ここは違うよ。おうちへ帰りたいよ。

【いつもありがとうね。】と笑顔で職員に話した日

◆キーワード
1　役割支援の大切さ
2　アプローチ方法
3　安心できる環境作り

宮城県・仙台市　グループホーム　よもぎ(よもぎの)埜

発表者：介護福祉士　横澤(よこざわ)　佳奈(かな)　　共同研究者：　職員一同(しょくいん　いちどう)

宮城県仙台市にあるグループホームよもぎ埜は、２ユニット１８名から成り立つ。１ユニットは自立支援や仲間との関わりを大切にしており、もう一つのユニットは、ゆったりとした環境の中でその人らしさを大切にした個別支援に重点を置いている。	事業所の理念は「ゆったり・いっしょに・たのしく・ゆたかに」です。当施設の取り組みとしては外出企画やレクリエーション活動が豊富なところです。地域との繋がりも親密で月１回認知症カフェ（HAPPY カフェ）やデイハウス（介護予防教室）を実施しております。

（取り組んだ課題・はじめに）
Ａ氏は２０２５年８月に当施設に入居した。Ａ氏は２０１９年よりアルツハイマー型認知症に罹患しており、入居前は他のデイサービスやグループホームの体験見学等を行っていたが、Ａ氏の意志決定により「なぜこんなところに行かなくてはならないのか、まだ元気なのに。」という理由で道に迷い号泣しながら１人で自宅に帰ったりすることが多かった。その為、Ａ氏の意思を尊重しながら訪問介護を週２回使用し、自宅にて家族３人で生活を送っていたが、主介護者がご高齢の為今回の入居に繋がった。入居後、「帰りたい」と悲鳴を上げて泣いて外へ行かれたりすることが毎日あったＡ氏が当施設において自宅のように安心して生活を送るためにはどのような支援が　求められるかを検討し、実際に取り組み、成功した取り組みについて報告する。
（倫理的配慮）
発表内容におきましては、本大会以外での資料や写真等の掲載はしないこと、それにより不利益を被ることがないことをご利用者様のご家族様に説明を行い、同意を得ている。
（具体的な取り組み）
対象者：Ａ氏　９３歳　女性　要介護１
　　アルツハイマー型認知症　Ａ１　Ⅱａ

①　：グループホーム入所前の生活観等の情報収集

②　：なぜ帰りたいと話すのか情報収集・分析

③　：安心できる環境作り
職員同士で話し合いを行い、Ａ氏の課題を探り検討した上で、以下の３つの視点から何か出来ることはないかをひもときシートを活用し、考える事にした。ひもときシートを活用し、①に関しては長年専業主婦で農作業や家事手伝いが得意であることを知る。②に関しては、主介護者の体調が心配なのと娘様が仕事と家事の両立が出来ているか心配だとのことを聞き取った。③に関しては、職員アンケートを実施。結果としては、声掛けの工夫、場所の工夫、役割支援の提案が主に意見として職員から挙がった。
（活動の成果と評価）
今回の取り組みは達成することが出来た。①に関しては、Ａ氏の生活観を日々の行動や会話の中から模索し、家族に協力していただき情報収集することが出来た。Ａ氏の過去の生活観を聞き取ることで、本人の興味・関心・特技等を知ることも出来た。②に関しては、Ａ氏が帰りたいと話された時には、「なぜ元気なのにここにいるのか分からない、なんでここにずっといないといけないんだ。」と話す事が大半であった。環境に馴染めていないと推測し、家族よりＡ氏の興味・関心を聞き取り、人の役に立つ事が好きとの情報を得た。③に関しては一番効果が大きかったと推測される。家族からの情報を基に職員アンケートを実施した結果を踏まえ、役割支援を提案することにした。まずは、食器拭きから始め、慣れてきたころに食器収納や食器洗いを提案した。役割支援を始めた際は、Ａ氏は表情が硬く、緊張していた様子であったが、１つの役割が終了する毎に「いつもありがとうね。」と感謝の言葉を職員が必ず伝えるようにしていた。役割支援をＡ氏の課題として取り組み始め１か月経過したころＡ氏より「ここ、皆さん優しくて・・居心地よいね。いつもなんかありがとうね。」と照れながら発表者に話された。
（今後の課題・考察・まとめ）
役割支援を行うことは本人の達成感や成功体験に繋がることを知った。Ａ氏より洗濯物干しやたたみ、お部屋の模様替え等も行いたいと声があり意欲的になった。Ａ氏との会話の中から組み取った上で今後もＡ氏の望む支援を取り入れていきたい。
（参考・文献など）

福祉専門職のための意思決定支援ガイドブック（中央法規出版）
対話の実践力（中央法規出版）

演題番号
ＰⅡ－②

パーソンセンタードケアを考える

BPSD は、心のサイン～その人らしさとは～

◆キーワード
1　情報収集、共有
2　BPSD
3　家族支援

宮城県・美里町　　グループホーム　歩風楽（ぽぷら）　A 棟

発表者：介護福祉士・課長　青野（あおの）　夏実（なつみ）

有限会社ポプラは、平成 17 年にグループホームを開所。ポプラで 1 番最初のグループホームである。同敷地内に有料老人ホーム 2 か所、デイサービス 3 か所、保育園 2 か所、ケアプランセンター1 か所がある。A 棟平均年齢は 88.7 歳、平均要介護度は 2.7 となっている。	開所から 21 年認知症高齢者の方々と携わってきました。東日本大震災、コロナウィルス蔓延の中でも利用者様、地域の方々との関わりを大事に、ポプラの３H 精神（Heart、Hand、Head）を胸に利用者様がありのままに暮らせる場所を目指し支援を行っております。

（取り組んだ課題・はじめに）
認知症高齢者グループホームでは、認知症を患い、一緒に暮らす家族が不穏行動に対し疲弊、自宅での転倒、入院をきっかけに在宅復帰が困難となり入所するケースがほとんどである。入所され「なぜ家に帰れないのか」等と訴え、不穏行動になる。その中で関わりに重点をおき、利用者の思いを聞き受け止めることで、利用者様の「らしさ」が少しずつ垣間見えてくる。しかし、コロナ禍の 3 年間でその関わりが希薄になったことは事実である。利用者同士はもちろんのこと利用者と職員の関係性も希薄化された。その頃から業務遂行が優先され「なぜ不安を訴えているのか」を深堀りしない環境となったことが課題だ。入所され 5 ヶ月経った A 様が帰宅願望や不穏行動が増え､A様の生活歴や家族関係を再調査し、本人の願いや思いを追求。職員との信頼関係を深めるアプローチを実施した。

（倫理的配慮）
本報告では、ご利用者様のプライバシーに配慮し、個人が特定されないよう情報（病院名や出身地など）を変更しております。事例使用については、家族様本人様の同意の上で尊厳を尊重し作成しております

（具体的な取り組み）
A 様のその時の思いを必ず聞く。できること、サポートしたらできることを活動の中でみつけていく。家事仕事で得意である為、そこを中心に取り組むよう職員へ周知した。生活歴、家族関係を洗い出す。帰宅願望を訴える際に A 様は旦那様や娘様 2 人、お舅さんのことを気にかけている。面会も入所し 2 度程。娘様 2 人と面談の機会を設け、面会の回数（月 1 回程度）や面会時の帰り際の声の掛け方を「また来るね」など次があることを強調するように伝えてほしいと共有。現在、ポプラではネームプレートを使用していない。安心できる場所づくりとして、職員のネームプレートを再度作成し、職員の名前を覚えてもらう。（職員それぞれの PR を一緒に書いてもらった）また、職員一人ひとりに A 様とはどんな人だと思うか、A 様に関わる際に気を付けていることを用紙作成し、書き出してもらった。

（活動の成果と評価）
得意な手先を使った活動を行った結果、仕事に向かう姿勢や丁寧な仕事ぶりが見れた。作業に対して具体的に感謝の思いを伝えることにより、A 様の前向きな変化が見られた。家族との面談の際に娘様 2 人からみた A 様についてお話を伺う。結婚後は夫の実家暮らし細かい性格の姑との生活や夫が単身赴任の為一人で子育てをされ、強い責任感で苦労を重ねてきたという。入所されてから面会の回数が少ない理由を伺うと「家に帰りたいと言われるとなんて答えたらいいのか分からない」「皆さんに迷惑をかけてしまうのでは」との思いを知る。施設側としても家族様が多忙ではないかとお互いに深い要望や思いを話せずにいたことを知る機会となった。面会後は「また来るって言ってたもんね」など約束を覚えている A 様の様子が見られる。安心感へ繋がっている。ネームプレートの着用したことにより A 様だけではなく他利用者様の反応が良く見られた。『あんた○○って言うの！』などそこから会話が生まれている様子が増えたように思う。

（今後の課題・考察・まとめ）
今回の取り組みを通して、利用者様・家族・職員とのコミュニケーションや情報収集したものを職員間で共有し、その方に合った支援を追求する重要さを改めて実感する。症状を見るのではなく「その人をみる」という視点、新しい認知症観がパーソンセンタードケアに繋がることだと考える。希薄化され業務が遂行されてしまう雰囲気を打破するために「なぜ？どうして？」と訴え、誰が主体なのかと考えてもらう癖をつけてもらいたい。

（参考・文献など）

BPSD 丸ごと症状扱いしていいのか
著　戸谷修二　和田行男

演題番号
ＰⅡ－③

「役割を持ちたい」という思いを支える

グループホーム入居者の就労継続支援Ｂ型利用に向けた取り組み

◆キーワード
1　認知症
2　グループホーム
3　就労継続支援Ｂ型

大阪府・岸和田市

しゃかいいりょうほうじんじくんかい　ぐるーぷほーむおおさかみどりがおか
社会医療法人慈薫会　グループホーム大阪緑ヶ丘

かわはら　やすひと
発表者：河原　康仁

たまき　しょうた
共同研究者：玉置　翔太

1　認知症対応型通所介護（共用型デイサービス） 2　緊急時認知症対応型共同生活介護（緊急ショート）	ユニットで緑豊かな自然環境が自慢です。社会医療法人であり医療面においても、安心できる環境です。

（取り組んだ課題・はじめに）

グループホームで生活する利用者にとって、日中の活動や他者との関わり、役割を持つことは、生活の充実につながる重要な要素である。

グループホーム大阪緑ヶ丘では、レクリエーションに加え、作業活動や農作物の切り干し大根作りなど、利用者が「できること」「人の役に立つこと」を実感できる機会を大切にしてきた。その中で、グループホーム内の洗濯物の片付けを楽しみに取り組む入居者がおり、作業を通して貢献することへの意欲がみられた。

今回、本人のADLの維持、QOLの向上「役割を持ちたい」という思いをきっかけに、就労継続支援Ｂ型の利用を検討し、利用開始に向けて取り組んでいる過程を報告する。

（倫理的配慮）

発表にあたり、入所者様の個人情報とプライバシーの保護に配慮し、医療機関及び入所者様の個人情報を匿名化することによって、入所者様が特定されないよう実施した。

（具体的な取り組み）

グループホーム職員が就労継続支援Ｂ型の利用について検討した。

しかし、グループホーム入居中に介護保険サービスと並行してＢ型を利用できるのか、受給者証の取得に必要な手続き、診断書の準備、利用に伴う自己負担額、申請を誰が行うのかなど、複数の確認事項が生じた。

行政への確認を行った結果、一定の条件のもとでグループホーム入居者が就労継続支援Ｂ型を利用できること、また介護報酬への影響がないことを確認した。

さらに、受給者証申請に必要となる診断書については、精神科医の協力を得て作成に向けた調整を行った。

一方、課税世帯である場合には利用者負担が発生する可能性があり、入居サービスとの自己負担額も考慮する必要があった。また、工賃と利用者負担額とのバランスについても課題となった。

そこで、グループホーム職員と就労継続支援Ｂ型職員が連携し、それぞれの役割を整理しながら、家族への説明、施設見学等を進めている。

【現在の状況】

現在は、就労継続支援Ｂ型の利用開始には至っておらず、受給者証取得等の必要な手続きを進めている段階である。

家族には、制度上の利用条件だけでなく、費用負担についても説明を行い、本人の希望をどのように実現していくかを一緒に検討している。

家族からは、経済的な負担だけを考えるのではなく、「入所後の残りの人生に後悔を残さないよう、本人の希望をかなえてあげたい」という思いが示されており、その思いを大切にしながら支援を進めている。

（活動の成果と評価）

今回の取り組みを通して、グループホーム入居者の「役割を持ちたい」という希望を実現するためには、本人の能力や現在の生活状況だけではなく、本人が何をしたいのか、どのような生活を送りたいのかという意思を出発点として考えることが重要であると感じた。

また、介護保険サービスと障害福祉サービスをまたいだ支援では、制度上の利用可否だけでなく、費用負担、申請手続き、家族の理解、事業所間の役割分担など、さまざまな課題を一つずつ整理する必要がある。

現在はまだ利用開始前ではあるが、本人の希望を実現するために、グループホーム職員と就労継続支援Ｂ型職員、家族、関係機関が連携して取り組む過程そのものが、本人中心の支援を考えるうえで重要であると考える。

（今後の課題・考察・まとめ）

今後は、受給者証の取得や利用開始に向けた手続きを進めるとともに、本人の体調や希望、家族の思いを確認しながら、無理なく継続できる利用方法を検討していく。

また、利用開始後についても、単に「Ｂ型に通うこと」を目標とするのではなく、本人にとって「働くこと」「役割を持つこと」「人の役に立つこと」がどのような意味を持つのかを大切にしながら支援していきたい。

演題番号
ＰⅡ－④

◆キーワード
1　社会参加
2　地域共生社会
3　多世代交流

認知症の人が地域の担い手となる実践

～子どもたちとの協働による地域清掃活動を通じた地域共生の取り組み～

宮城県・仙台市

しゃかいふくしほうじん　がっこう　さいわいちょう
社会福祉法人ライフの学校　グループホーム幸町キャンパス

かいごしえんせんもんいん　えんどう　けい
発表者：介護支援専門員　遠藤 圭

かいごしょくいん　こうだ　みく
共同研究者：介護職員　幸田 未来

認知症対応型共同生活介護　定員 18 名、2 ユニット	「支え合って学び合ってすべての人の人生を豊かに」をライフの学校法人ミッションとしている

（取り組んだ課題・はじめに）
当法人では「世代を超えた交流や地域活動を通して、人とのつながりや支え合いの大切さを学び、誰もが安心して暮らせる地域づくり」を目指している。
施設前の公園は、子どもやペット連れの家族が集う憩いの場であるが、雑草が膝丈ほどまで生い茂り、ゴミのポイ捨てもみられるなど、安心して利用できる環境ではなかった。
認知症グループホームでは、これまで培ってきた経験や能力を地域で発揮する機会が少なくなることがある。当事業所においても、以前は意欲的に外出していたものの、年々意欲低下がみられ、居室で過ごす時間が増えているパートナー（利用者）がいた。「若ければなぁ。あんな活動（草取り）してみてぇな。でも今は寝る方がいい」と自身が地域貢献することは難しいと感じている様子もうかがえた。
しかし、その一方で「子どもと触れ合いたい」「昔はボランティア活動をしていた」との声も聴かれていた。そこで、地域清掃活動を通して、認知症のパートナー（利用者）も地域の一員として役割を持ち、多世代と交流しながら社会参加できる機会を創出したいと考え、本取り組みを実施した。

（倫理的配慮）
本発表にあたり、パートナー（利用者）本人および家族へ趣旨を説明し同意を得た。また個人が特定されないよう十分配慮した。

（具体的な取り組み）
近隣中学校と連携し、公園清掃活動を実施した。事前にスタッフが草刈りを行い、当日はパートナー（利用者）と中学生が協働して草を集め、ゴミ袋へ入れる作業を行った。活動中は自然な挨拶や会話が交わされ、中学生が見つけたミミズやナメクジをパートナー（利用者）へ渡すなど、交流がみられた。活動後には、きれいになった公園で中学生がけん玉を披露し、パートナー（利用者）が称賛する場面もみられた。
また、放課後等デイサービスの子どもたちと協働し、仙台市環境美化活動「アレマキャンペーン」へ参加した。道路や公園のゴミ拾いを実施し、延べ 73 名が参加した。活動を通して、パートナー（利用者）が子どもたちを見守りながら共に作業する姿や、子どもたちの成長を喜ぶ姿がみられた。地域住民からも声を掛けられ、地域とのつながりや社会参加を実感できる機会となった。

（活動の成果と評価）
参加したパートナー（利用者）から「昔を思い出す」「皆でやる活動はいいね」との発言が聞かれ、子どもとの交流を通して笑顔や自発的な参加がみられた。また公園で遊ぶ子どもたちをみて「本来公園はこうじゃないとな。よかった」「あそこは俺じゃなきゃできないもんな」と話され、自身の活動が地域貢献したことを喜ばれていた。家族からは「昔の便利屋、大工さんの点検が入りましたね」「（写真を見て）とても生き生きしていた」との言葉が聞かれ、本人らしさが発揮されている様子がうかがえた。
また、中学生へのアンケートでは「楽しかった」100％と全員が肯定的だった。「認知症のある方へのイメージが変わった」との回答も 100％であり「緊張したけどとても楽しかった」「もっと話してみたい」との意見もあり「また活動に参加したい」と全員が回答した。活動後は学校だよりの掲載につながり、学校側からボランティア部や美術部との新たな連携の提案も受け、継続的な地域交流への発展となった。

（今後の課題・考察・まとめ）
今回の実践では、地域清掃という共通の目的を持ち、多世代が協働することで認知症の人が地域の担い手として役割を持ち続けることが、本人の生活の質の向上だけでなく、地域住民や子どもたちの認知症理解を深め、地域共生社会の実現につながる可能性を見出すことができた。今後も地域や学校との連携を継続し、協働して活躍できる場を広げていきたい。
（参考・文献など）　なし

演題番号
ＰⅡ－⑤

GHでのボランティア活動

職員とボランティアの連携・運営

◆キーワード
1　ボランティア
2　職員
3　共に

広島県　福山市

多機能地域ケアホーム（たきのうちいき）　ありがとう　グループホーム

発表者；介護職　妹尾（せのお）　佳子（よしこ）

２００４年１月開設　木造２階建　１８名定員 平均介護　4.0	共用デイ、短期入所実施　各種加算算定 ２０１７年リビングオブザイヤーで最優秀賞受賞

【取り組んだ課題・はじめに】
　当グループホーム（以下GH）では、ボランティアの方達による食器洗いや掃除をしてくださる方が数名いる。
当グループホームでの取り組みを紹介する。
【倫理的配慮】
　今回の取り組み発表にあたり、入居者、家族、職員､その他関係者へ目的を説明し同意を得た｡また、施設長に許可を得ている。
【経緯】
　現在家族ボランティア１名、外部ボランティア３名。月にそれぞれ３～４回参加
Ａ氏　家族ボランティア（5年目）
　コロナウイルス感染予防で面会が制限されている時期の入居で、当時の管理者からボランティア参加形式で間接的に入居者の様子を見ることができる計画を聞き、参加を希望。
Ｂ氏　前入居者の家族ボランティア（5年目）
　入居してからお世話になっている職員の手助けが何かできないかなと思い参加したのがきっかけで、GHで母親を看取ってもらいそのまま現在も継続。
Ｃ氏　外部からのボランティア（１０年以上）
　福山市社会福祉協議会からボランティアの募集を知り応募し、傾聴ボランティアとして参加される。
Ｄ氏　外部からのボランティア（今年の春から）
　当 GH の関連事業所を利用されていたご主人が亡くなり気持ちまで落ち込み家から出る事も減っていた。少し落ち着き、今までお世話になった人の為に何かできないか？自分の得意なお花の世話を通じて人の為に何かできないかなと思い、「お花の手入れ」を引き受けました。
【活動内容】
利用者と一緒に活動する事で認知症に対する理解を深め、家族との信頼関係を深め、外部との交流により、社会的交流に繋がると考えボランティア活動をお願いしています。
・リビングの掃除・居室の掃除・食器洗い・食事の準備の手伝い・庭の花の手入れ・傾聴・行事のお手伝い・お誕生日のケーキ作り・折りバラを利用者に指導、一緒に作品作り　など
【活動の成果と評価】
　1）事業所側
・介助に専念でき、心理的余裕・負担軽減
・外部の方が介入することで、職員の気が引締まる
・自分のケアを振り返ることができる
・ボランティアの方との信頼関係の構築
・風通しの良い事業所（不適切ケアの抑止）
・雑務の大変さも理解してもらえる。
・馴染みのボランティアの方の顔を見ると安心する
・家族会で表彰する事で、他の家族さんにも知ってもらい、ボランティアの増員へ繋がる。
・ボランティアの方に対し、家族・入居者の方も職員と同じように接してくださる
・畑や花壇の手入れ方法を教えもらえる。
2）ボランティア側
・家族会での表彰などで一層の励みになる。
・ボランティアに近況を伝えやすい、伝わりやすい。
・職員との信頼関係の構築
・自分の家族に会え、他の入居者との交流が生れる。
・通常の連絡では見る事ができない様子がわかる。
・刺激になり向上意欲、引きこもり防止になる。
・定期的に行く所があり、皆さんに喜んでもらえる事で、生きがいを持つ場所に繋がっている。
・一緒に介護をしている。
3）利用者側
・家族に会え、嬉しい。
・外部との交流になり刺激になる。
【ボランティアの感想】
・家庭的な雰囲気のなかで、とても楽しんでいます。
・十数年嫌な思いをしたことは一度もありません。
・好きな事を任せて頂き、入居者の方々が喜んでいる姿にやりがいを感じている。
・ここに来ることで、母親の事を思い出したり、ご家族に色んな経験談を話すことができる。
【今後の課題・まとめ】
外部の方がいつでも出入りでき、一緒に活動する事で連携・運営ができる。今後もボランティアの参加者を積極的に受け入れていきたい。

演題番号
ＰⅡ－⑥

BPSDの支援と職員の自己効力感調査

認知症チームケア推進加算・当施設での取り組みの効果

◆キーワード
1　行動・心理症状（BPSD）
2　自己効力感
3　認知症チームケア推進加算

島根県・安来市　グループホーム　やすらぎの家（やすらぎのいえ）

発表者：理学療法士 小林　泰喜（こばやし　たいき）
共同研究者：福島　智恵美（ふくしま　ちえみ）　竹本　和生（たけもと　かずき）

認知症対応型共同生活介護 2ユニット定員18名 2023年4月開設　職員：介護職員※介護福祉士含む　看護師・理学療法士・歯科衛生士等専門職在籍	住み慣れた地域で役割を持ってその人らしく自立した生活がおくれるよう支援している。同法人の病院併設、同敷地内にあり、医療と介護の地域連携を図っている。

（はじめに）
認知症チームケア推進加算（以下チームケア加算）は行動・心理症状（以下BPSD）BPSD＋Q/BPSD25Qなどの評価が必須であり、継続してPDCAサイクルに取り組む事で、BPSD等の評価技術はチームとして向上したが、一方、BPSDの改善支援技術の向上について、具体的な評価は無く、実感に乏しいとの意見が多く聞かれる。そこで、個人やチームとしての支援についての気付き、強みや弱み、その傾向や課題について明らかにする為に調査を実施した。
（倫理的配慮）
今回の調査研究に際し、協力者に対して不利益が生じることが無いこと、また個人が特定されないよう配慮し、研究の実施および発表について協力者の同意を得た。また、当法人の倫理委員会の審査を受審し、承認を得た。
（具体的な取り組み）
対象：チームケア加算算定開始2025年3月以前から当施設に勤務し、本加算に係る業務に継続して関与した職員8名（男性1名、女性7名）うち介護福祉士7名、介護職員1名。調査期間：2026.7月。
方法：鄭らによる介護職員のBPSDを改善する支援の自己効力感の質問紙調査（以下鄭らの調査）により、BPSD支援（22項目）、構成概念妥当性が確認されている5因子構造モデル（第1因子：余暇活動の参加支援および役割形成支援の自信，第2因子：他の高齢者との関係形成支援および家族との関係維持支援の自信，第3因子：なじみの環境整備の自信，第4因子：安全配慮の自信，第5因子：職員と高齢者との関係形成の自信）、第1～第5因子の4～5段階。一般自己効力感は（行動の積極性、失敗に対する不安、能力の社会的位置づけの3因子）4～5段階。加えて、対象者が加算算定直前の自身を回顧し、第1～第5因子について現在の自身と比較する主観的な調査、3段階評価を実施し、それぞれの平均値を算定、記述回答の内容を検討した。
（結果と評価）
以下のとおり、主観的な調査（表Ⅰ）、自己効力感調査（表Ⅱ）、一般自己効力感（表Ⅲ）平均値を記載。

主観的調査（表Ⅰ）

	当施設平均
第1因子	2.18
第2因子	2.23
第3因子	2.21
第4因子	2.44
第5因子	2.25

自己効力感調査（表Ⅱ）

	当施設平均	各因子平均
第1因子	2.95	2.90
第2因子	2.98	2.93
第3因子	2.50	2.76
第4因子	3.09	3.26
第5因子	3.33	3.33

一般自己効力感の平均値（表Ⅲ）

項目（領域）各調査/平均値	当施設平均	各因子平均
行動の積極性	3.04	3.20
失敗に対する不安	3.53	2.89
能力の社会的位置づけ	2.34	2.82

記述課題要旨：マンパワー不足、繁忙さにより十分に寄り添えない。BPSDの理解力に差があり、職員共通の対応困難。不穏な状態の方の対応技術に不安等。
（今後の課題・考察・まとめ）
自己効力感の各評価は構成概念妥当性が確認されている調査内容とし、対象者は少ないが、鄭らの調査と同様に介護福祉士の割合が多く、当施設の結果と対比する意味はあると考えた。主観的な調査ではチームケア加算算定前より全ての因子で職員の平均の自己効力感が高い値を得た。チームケア加算においてBPSDを改善する支援の個人、チームの技術向上に繋がっている可能性があると考える。第1,2因子は上回り、第3,4因子は下回っていた。一般自己効力感「失敗に対する不安」高い値を示し「社会的位置づけ」が若干低値を示していた。これらがチームの支援と支援力の傾向を示している可能性がある。一方、記述回答より、業務の繁忙さや個人のBPSDへの理解力、支援力の差など業務に係る課題が示されており、今回の結果を踏まえ、職員個人の「気づき」を大切に、上記傾向から今後の課題について多角的な検討が必要であると考えた。
（参考文献）
鄭尚海 2024.9.09，介護職員による認知症高齢者の行動・心理症状（BPSD）を改善するための支援およびその質を高める要因に関する研究，大阪市立大学。

演題番号
ＰⅡ－⑦

◆キーワード
1　つながり
2　生きがい
3　メリハリのある生活

Life with a smile

心をかよわせるふれあい交流

京都・宇治市

かぶしきかいしゃ　けあとらすと　　めいぷるりーふなぎ
(株)ケアトラスト　　メイプルリーフ名木

しおばら　だいち
発表者：塩原　大地

共同研究者：前田恵・寺崎愛実・長島麻里
ワイン・ジン

株式会社ケアトラストが運営。地域密着認知症対応型デイサービス。1日のご利用者定員12名。	「自立」「開放」「支え合い」「前向き」の理念のもと利用者が安心し、ご本人らしく生活がおくれる事を目指している。

（取り組んだ課題・はじめに）
コロナウイルス感染症の流行を期に高齢者と地域との交流機会は大きく減少した。また、子ども達とも異世代との関わりを持つ機会が少なくなっている。当事業所では、高齢者デイサービスと放課後デイサービスが併設しており、双方の交流機会を設ける事で、高齢者の生活意欲向上と子供たちの社会性の育成につながるのではないかと考え、子どもの長期休みの期間に「夏祭り」を通した交流。外食支援や高校生との世代間交流の取り組みとその結果について報告する。

（倫理的配慮）
発表するにあたり各関係者に了承を得ている。

（具体的な取り組み）
・令和7年8月より交流を開始。
～主な活動内容～
・夏祭り（2部制で高齢者と子どもが「店番役」と「お客役」を交代し交流を深めた。店番では案内やシール貼りを担当し、お客役は各ブースを回りゲームを楽しんだ。役割を持つ事で自然な会話や助け合いが生まれる様工夫した）
・喫茶や飲食店への外食（半年に1度）
・クリスマスコンサートを実施（令和8年は放課後デイサービスでインフルエンザが大流行した為中止になったが、今年度は実施予定）。
・令和8年6月から高校生2名が月1～2回来訪（食後のティータイムや午後レクリエーションを一緒に過ごす）交流時は高齢者・子供の双方が安心して参加できる環境づくりを行い、職員が必要に応じ仲介した。

（活動の成果と評価）
夏祭りでは、高齢者からは「子どもと話したり、一緒に過ごす事で元気をもらえる」「また会いたい」等の声が聞かれ、普段レクリエーションへ参加が消極的な利用者も交流行事時は積極的に声をかけたり、自ら子どもに歩み寄る姿が見られた。子ども達も高齢者に自ら声をかけたり、夏祭りの遊びの方法を教えあったりと思いやりのある行動が自然と見られた。
外食行事では、希望された方を数名ずつのグループに分けさせてもらい、喫茶店や飲食店に出かけた。普段とは異なる環境で食事を楽しむ事で利用者様の表情もいつも以上に明るくなり、数年ぶりの外食企画で外出前から話題にされる姿も見られた。自らメニューを選択し、地域の店舗を利用する事で社会参加への意識向上にもつながった。
高校生との交流では、共に過ごす時間を通して会話が弾み、利用者自身の経験や思い出を語る機会が増えた。「若い子と話すと元気になる」「負けてられない」と言った声が聞かれた。継続的な交流を通して、利用者の表情や会話の量の増加が見られ、生活への楽しみや生きがいにつながっている事がうかがえた。また、利用者家族からも「孫ももう大きくなり子どもと関わる機会が少なくなっている為、良い刺激になっている」「子どもとの交流は積極的に実施して欲しい」と意見が聞け、施設の特色ある取り組みとして評価を得ることが出来た。

（今後の課題・考察・まとめ）
今回の取り組みから、世代間交流や外出支援は高齢者の社会参加や生活意欲の向上、生きがいづくりに有効である事が分かった。特に、子どもや高校生との交流は利用者に新しい刺激を与え、外食行事は地域とのつながりや自己選択の機会を提供する事につながった。
また、夏祭りの行事だけではなく高校生との継続的な交流を行う事で利用者の楽しみや社会とのつながりを維持する効果が期待できる。
今後は交流内容の充実や参加者の拡大、他イベントへ積極的に参加し、多世代が自然につながる地域づくりに貢献し、利用者一人ひとりの笑顔と生きがいを支える取り組みを継続していきたい。